

共同生活援助事業所「ホームわかば」

第 1 回 地域連携推進会議 議事録

1. 実施日時

令和 8 年 3 月 25 日（水） 13:00～15:30

2. 実施場所

共同生活援助事業所「ホームわかば」 ホームわかば新開

3. 出席者

事業所職員	…	3 名（施設長、サービス管理責任者 1 名、生活支援員 1 名）
利用者の方	…	1 名（ホームわかば家老渡より）
利用者ご家族	…	2 名
地域の方	…	1 名（民生委員）
福祉に知見のある方	…	1 名
行政関係者	…	1 名（因島総合支所 因島福祉課より）

計 9 名

4. 会議内容

資料を配布し、その内容に沿って会議を進行した。

① 開会挨拶

1. 「ホームわかば」施設長より参加の謝辞を述べ、本会議の目的について簡単に説明を行なった。

② 出席者紹介

③ 地域連携推進会議の目的について

1. 厚生労働省「地域連携推進会議の手引き」に沿い、「利用者と地域との関係づくり」「地域の人への施設等や利用者に関する理解の促進」「施設等やサービスの透明性・質の確保」「利用者の権利擁護」が主な目的であることを説明した。

④ 施設概要および利用状況

1. 運営しているグループホーム（全8ヶ所）の紹介を行なった。

※は夜勤者の配置があるグループホーム

ホームわかば 蘇功（5名） 1993年開所（築32年）

ホームわかば 家老渡（5名） 1997年開所（築55年）

※ホームわかば せと・しらたき（各4名ずつ、計8名） 2001年開所（築25年）

ホームわかば 田熊（4名） 2005年開所（築53年）

ホームわかば 丸池（6名） 2008年開所（改築17年）

ホームわかば 仁井屋（6名） 2011年開所（築41年）

ホームわかば 外浦（6名） 2014年開所（築44年）

※ホームわかば 新開A・B（各6名ずつ、計12名） 2022年開所（築4年）

「短期入所事業所わかば」併設（最大2名）

2. 利用状況について説明を行なった。

- ・定員51名に対し、現在の利用者数51名（満床）
- ・平均年齢55.3歳（最高齢82歳、最年少26歳）
- ・40～60代の利用が中心となっている。

3. 令和8年度の組織体制（予定）について説明を行なった。

施設長 1名

サービス管理責任者 2名

生活支援員、世話人 34名（技能実習生2名、特定技能実習生3名を含む）

看護職員 1名

計38名

⑤ 事業所の方針および取り組み

1. 法人の運営理念『「すべての人が地域社会で普通の生活をする」そんな地域をつくる』の説明、およびそれに基づいた事業所の基本的な方針が「共同生活住居において家庭的な環境の下で、食事提供、金銭管理、健康管理、その他の支援等を行うことにより、入居者がその有する能力に応じて自立した日常生活を営むことができるように支援する」であることと、具体的にどのような支援をどの程度行っているか説明を行なった。
2. その他、実施した法人研修の概要（虐待防止研修）や、昨年より導入している介護記録ソフト「ケアカルテ」の仕組みなどについて説明し、支援の質を高めるために行っている取り組みについて紹介を行なった。
3. 利用者の生活の流れ（平日・休日）について説明を行なった。
 - ・ 平日の日中は、利用者はそれぞれの通所施設（生活介護事業所、就労継続支援 B 型事業所、デイサービス）に、バスや通所事業所の送迎で通所されている。
 - ・ 夕食後は自由時間となっており、自分の部屋で DVD などを見たり、自分の洗濯物を干したり、リビングで他の利用者の方と交流したり、利用者によって過ごし方も様々である。
 - ・ 休日は支援員が不在となるグループホームもあるが、不在となる時間帯に支援員が巡回を行い、体調不良やトラブルがないか確認を行っている。またそういったホームは休日の食事の提供が無いため、利用者自身で食事を購入している。一人での買い物が難しい方は、店舗への送迎などの支援を行なっている。
 - ・ 会議に参加した利用者の方に、自分の生活について話していただいた。
 - ・ 休日等の活動内容について、写真を数枚掲載して紹介を行った（ドライブレク、たこ焼きパーティー、利用者誕生日、夏祭り、ボウリングレク）。

⑥ 現状の課題

1. 住居の老朽化
 - ・ 全体的に築年数が古く修繕が必要な箇所もあるが、物によっては修繕費がかなり嵩むものもあり、全てに対応できていないのが現状である。
2. 利用者の高齢化
 - ・ 利用者の年齢構成は 60 代が最多となっており、夜間の支援がない住居の利用者も含め、必要な支援が少しずつ増加している状況である。65 歳以上の利用者については介護保険との併用を行いながら、デイサービス等と連携をとり支援を行っている。また、「住居の老朽化」への対策と併せ、利用者の現状に合わせた新しい事業を検討している。

3. 支援員の高齢化、人材確保

- ・支援員の高齢化が進み、支援のために必要な人員が不足しがちになっている。対策として、技能実習生や特定技能実習生の受け入れを行っている（インドネシア人5名）。普段の業務においては日本語でのやりとりに概ね問題はないが、季節の変わり目や寒暖差の大きい時期など、利用者の更衣の支援で気候に合わせた衣服を着用できていないことが時々ある。母国との気候や文化の違いも影響していると思われるが、日本人の職員も確認を行い、適切な衣服を選択できるよう指導を行っている。

4. 災害時の備えについて（物資・食料の備蓄等）

- ・法人全体で業務継続計画（BCP）を策定しており、災害時にどのような優先度で支援を行っていくかを定めている。例えば大規模な自然災害の発生により、法人全体の出勤可能な職員数の割合が低い場合は、場合によって通所事業を停止し、障害者・高齢者のグループホームの業務の維持のために人員を集約するといった内容を定めている。
一方で各グループホームの備蓄などは不十分であり、今後保存水や食料、卓上ガスコンロ、災害用トイレなどを各ホームに備えておく必要がある。

5. 同居利用者間の人間関係

- ・利用者各々の障害特性や、障害以前の性格・価値観の違いもあり、言い争いやトラブルが発生することがある。支援員が間に入ってお互いの思いを聞き取り、全員が納得して解決できるよう努めているが、根本的な解決が難しい事柄もあり継続した課題となっている。

⑦ 質疑応答（グループホーム訪問で出た意見も含める）

1. グループホームによって夜間の支援が有るところと無いところがあるが、夜間の支援が無いホームには、やはり障害の程度が軽い利用者を割り振っているのか。また、年齢層なども比較的若いのか。
 - ・障害支援区分に関しては、夜間の支援が無いグループホームを利用されている方の方が全体的に低い。しかし、「現状の課題」の項でも触れた通り、利用者の方も全体的に高齢化しており、夜間の支援が必要ないグループホームであっても、より密接な支援が必要になっている利用者の方も増えてきている。年齢に関しては、特に差があるわけではない。

2. 地域の敬老会などに関わりはあるのか。
 - ・高齢の利用者には、通所先の施設でお祝いをいただくなどの関わりがある方もいらっしゃるが、現状では事業所として関わりを持つ取り組みなどは特に行っていない。
3. 毎日の服薬に関して、共用スペースの利用者の手の届く箇所にお薬カレンダーがセットしてあるグループホームがあったが、これは利用者が自分で薬をとっているのか。服薬タイミングが違う薬を飲んでしまうなどの、服薬ミスリスクがあるように感じる。
 - ・円滑に業務を行うため、お薬カレンダーの設置が共用スペースになっている場合はあるが、必ずしも利用者自身が薬を管理している訳ではなく、支援員が薬をとって利用者にわたしているケースが多い。場合によっては共用スペースにセットする薬を最低限の薬（1日分）に留めたり、利用者立ち入り不可のスペースで薬の管理を行ったりするなど、利用者それぞれの障害特性や障害の程度に合わせた対応を行っている。

⑧ 各グループホーム見学

1. 新開 A・B、せと・しらたき、田熊、家老渡、仁井屋、蘇功、外浦、丸池と巡回を行った。

⑨ 次回開催について

1. 次回の開催時期と、会議の内容（予定）について説明を行った。
2. 構成員の方に改めて参加の謝辞を述べ、次回以降の会議の実施についても協力していただけるよう依頼した。

以上